

【原典翻訳】 ナームク・ケマル著 『オスマン史』 序 文

小笠原， 弘幸
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

勝本， 英明
九州大学大学院人文科学府

仲本， 響
九州大学大学院人文科学府

山本， 敬祐
九州大学大学院人文科学府

他

<https://doi.org/10.15017/4372121>

出版情報：史淵. 158, pp.107-127, 2021-03-07. Graduate School of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



【原典翻訳】 ナームク・ケマル著 『オスマン史』序文

(監訳) 小笠原弘幸
(訳・訳注) 勝本英明、仲本響、山本敬祐、
坂田舜、田中みなみ、岩元恕文、
辻大地

【翻訳にあたって】

本稿は、ナームク・ケマル Namık Kemal 著『オスマン史 *Osmanlı Tarihi*』の、「執筆意図 ifade-i meram」と題された序文の全訳である。

近代オスマン帝国には、「新オスマン人」と呼ばれる、立憲制をめざし活動した知識人たちがいた。そのうち代表的な人物が、ナームク・ケマルである。彼は、1840年にテキルダールで、高級官僚の息子として生まれた。翻訳局に勤め官僚としての経歴を積む一方で、西洋思想に触れ、新聞に論説を寄稿するなど、文筆活動に携わるようになった。しかし1867年、専制化した政府を嫌い、パリ、ついでロンドンへ亡命する。亡命先でもケマルは文筆活動に携わり、同時に西洋の知識人と交わって思想を深めていった。

その後、ケマルは1870年に帰国するが、最終的にイスタンブルに戻るのは、クーデタによって当時の君主アブデュルアズィズ（位1861-76年）が廃位された1876年である。そこでケマルは憲法制定委員会に加わり、オスマン帝国憲法（通称「ミドハト憲法」）の成立に尽力した。しかし、新たに即位したアブデュルハミト二世（位1876-1909年）は、すぐに憲法を停止し議会を閉鎖させ、立憲派の人々を次々と放逐していった。ケマルも左遷され、地方の知事を転々とする事となる。1884年にロドス島に知事として赴任したケマルは、文教政策に力を入れるかたわら、1886年ごろより、生涯の集大成というべき『オスマン史』の

執筆をはじめた。

すでにケマルは、軍事学校の教科書とする目的で『軍事史 *Tarih-i Asker*』を書き進めていたが⁽¹⁾（未刊、『オスマン史』はそれをもととし、全12巻となる構想であった⁽²⁾）。ロドス島において十分な史料を参照することができなかったケマルは、関連書籍を送るよう、イスタンブル在住の友人にしばしば手紙を送っている⁽³⁾。

『オスマン史』の第一分冊は、ヒジュラ暦1305年に刊行された⁽⁴⁾。この分冊は、『オスマン史』のために書かれた「序説 *medhal*」のうち、「執筆意図」およびローマ史をあつかった小編である（本稿では、これを初版とする）。しかし、第一分冊は刊行後、その内容が問題となって発禁・回収処分となった。問題とされたのは、「啓蒙」や、蒙昧の象徴として「彗星」という単語が用いられたためだったという。ケマルはこの処分に大きく落胆し、刊行から間もない1888年に没した。未完となった『オスマン史』は草稿のまま保管されていたが、第二次立憲政期に『ケマル全集 *Külliyyat-ı Kemal*』の一部として刊行された（本稿では、これを第二版とする）⁽⁵⁾。『オスマン史』は、未完ではあるものの、オスマン帝国における近代的歴史叙述の黎明を告げる画期的な作品だといえる。その序文には、西洋の歴史研究に影響を受けつつも、イスラム世界に伝統的な歴史叙述の価値を認め、両者をいかに総合すべきかという思索がみとれる。

現在、『オスマン史』の手稿はアンカラのトルコ歴史協会に保管されているが、未整理のため閲覧・複写は許されなかった。そこで翻訳の底本としては、初版に収録されたテキストを用い、第二版も参照した⁽⁶⁾。将来、手稿本を参照した完訳がなされる必要があるだろう。『オスマン史』は、これまで二度、現代トルコ語訳されており、本訳稿においても適宜参照した⁽⁷⁾。また、『世界史史料』第8巻において一部が日本語訳されている⁽⁸⁾。

翻訳にあたって、原文には節分けはないが、読みやすさを考慮して内容ごとに区切りを設け、監訳者が節タイトルを付した。また、文章を分ける、あるいは語順を入れ替えるなどの工夫を試みた。原文には人名に括弧を付している場合が多いが、不要と思われる箇所は適宜省略した。

〈 〉は原著（初版）の頁数、[]は訳者による訳文の補足、〔 〕は訳者による追加説明である。年紀については、ヒジュラ暦の場合は「H.」を、財務暦の場合は「R.」を付し、西暦も併記した。

なお本稿は、科学研究費20K01001による成果の一部である。

【原典翻訳】 ナームク・ケマル著『オスマン史』序文

〔第二版冒頭〕⁽⁹⁾

ヒジュラ暦1306（1888/9）年⁽¹⁰⁾に最初に出版された『歴史』第一分冊の刊行から数日後、アブデュルハミト⁽¹¹⁾の命令で、取り次ぎの間⁽¹²⁾からナームク・ケマルへ宛てて書かれた電信の写しである。

『オスマン史』の序説として、ローマ史と題された出版を飾る場たる第一分冊である偉大な作品が、カリフ位の避難所たるお方によってご高覧され評価される次第となった。しかし、恵みある著作のいくつかの語句と単語が曲解と難癖に遭い、貴殿について完全なる陛下の至高の恩恵が失われる原因となるかもしれない、との意見があった。それゆえ前述の歴史書の出版を差し止めるとともに、いまある刊本が回収されるため、関係者に貴殿から直ちに通達がなされる必要がある。この件について、返答を待つ。

取り次ぎの間より ベスィム

『オスマン史』

第一巻の第二分冊は、[R.1] 326年カーヌヌ・サーニ一月15日〔1911年1月28日〕に出版される。

この第二分冊は、立憲政形成のあり方と、行政および立法権について、非常に有益な知識と判断を含んでいる。

『黒い災厄 *Kara Bela*』⁽¹³⁾

第一シリーズの二作品目である『黒い災厄』は、[R.] 1326年カーヌヌ・サーニー月20日〔1911年2月2日〕に刊行される。

たぐいまれなる悲劇の戯曲である。

〈5〉

執筆意図

歴史の意義——原則と手段

歴史とは、過去の出来事を未来に伝える者である。表向きは、物語からなっているように見える。しかし真実は、王者の学 *fen* という称号でもって敬われる、統治の技のもっとも偉大な従僕のひとりである。

真実！ 国民 *millet* の歴史を知らずして、その未来や進歩の要因のあるなしは、どこから学べようか？ 政治に必要なものは、目で見られ、手で触れられるような物質から [学ばれるの] ではない。器具で計測され、方程式で解かれるような自然科学や数学から [学ばれるの] でもない。

原則 *usul* というのは、全く利益がないと考えられており、手段 *tedbir* というのは、大いに利益があると見なされている。しかし、無益と考えられる原則を放棄し、この有益と見なされている手段を認めることは、国家の進歩を阻害し、未来を危機に陥れるのである。[H.] 1000年〔1591/2年〕からまもなく、精励が求められずしてティマールが与えられるようになり、イエニチェリ軍団に [デヴシルメではなく] よそ者からなる10万人が加えられた。ティマールのために精励を求めるような [一見して] 無益な原則を破棄することと、一気に10万人の兵を獲得するような有益な手段を採ること⁽¹⁴⁾。こうしたふたつの措置は、ジェラーリーの災禍⁽¹⁵⁾ が現れ、イエニチェリ軍団の〈6〉秩序が乱れる原因となった。国家は、このため何度か廃絶の危機に遭った⁽¹⁶⁾。

文明社会とよばれる団体〔もしくは法人〕 *şahs-ı manevî* にとって、成長が止むことはありえず、その真実の生命は進歩であり、停滞ではない！ 進歩の道において、時代に適した駅亭から多少なりとも遠ざかっていることは、腐り始

めた死体のあいだに留まるも一緒なのだ。そのため、この状況にある社会は、一時的に継続することができても、危険な病から健全でありつづけるのは不可能なのである。

歴史と政治

現代において、ある民族 *kavim* が、行動においては鉄道、思考においては電流の素早さで進む進歩の競争に加わるには、他の諸民族 *akvam* に存在する手法や方法をどう獲得するのかを知ることだ。それを自身の能力と比較したあとに、実行できるもの、無害であるものを受け入れねばならない。そのあと、対比させ十分に調整することで、国民の *milli* 状況に適合させる必要がある。このやり方に必要な知識を、統治者に与えるためには、歴史学 *fenn-i tarih* 以外の方法はない。

たしかに、政治の世界と呼ばれる驚嘆すべき劇場において、ナーディル⁽¹⁷⁾ やメフメト・アリ⁽¹⁸⁾ のような、歴史 [を知る] どころか、読み書きすらできないのに、ある民族 *kavim* を消滅の危機から救い、あるいは国土をきわめて繁栄させた、一連の奇跡が現れたことをも、歴史はわれらに示す。しかし寛大なる神は、この不完全な世界を、こうした天才たちで溢れるようには造らなかつたようだ！ とくに、人間社会の性質はつねに、絶対的な勝利者の鉄爪でもって引き回されながら、あるいは、その専制の剣でもって打ち据えられながら、〈7〉どこかへ連れて行かれることに耐えられない。たとえその地点が、人類が目指すところの極限だとしても。

政治において、歴史を知らずになされる事々は、たんに有害なのではなく、場合によっては笑うべきであり、政府の真剣さと威信を損なう。近年、エジプトにおける軍事状況の改革を任じられたあるイギリス人将校は、エジプト人のあいだの軍紀を守るため、規律なき者たちを軍人職のような偉大な名誉から追放することによって、罰しようと考えた。しかしエジプト人は、[軍隊から逃れるために] 親指を切断したり目玉のひとつをくり抜いたりすることを、軍人たることより簡単と見なしていた⁽¹⁹⁾。このため、メフメト・アリは、指無しと

盲目の軍団を編成せねばならなかった [ほどであったから、イギリス人将校による罰は無意味だった]。その国の歴史的状況を知らずして実行されんとしたこの手段と、期待された結果のあいだの相違が、どれほど嘲笑にふさわしかったか、いうまでもない。

人間は、人生のはじまりから終わりまで、姿かたちの多くの面や器官の一連の構成要素を、継続的あるいは一時的に保ちつつ、徐々に成長し変化する。同様に、各部分が人間からなる精神的存在たる人間社会も、天与のものや獲得したもの、あるいは先例や慣習を突然脱ぎ捨てて、新しいかたちや本質を作り出せない。この真理は、イスラム法における判決 *ahkam* は時代の変化とともに変わるのに、なお慣習は確固である、ということに依拠している。

それゆえに、国民 *millet* の先例を考慮せずに、言い換えれば歴史を知らずに、未来のために何をしたとしても、たいていは、〈8〉損害から、あるいはもっと悪い汚れた不名誉から逃れられない。逃れたとしても、[先例を適切に] 適用する能力はない。近年の偉大な哲学者のうち、ロック⁽²⁰⁾ とジャン・ジャック・ルソー⁽²¹⁾ は、政治的法 *hukuk-i siyasiyye* の創始者であったので、ひとりにはカロライナ⁽²²⁾、もうひとりにはポーランドとコルシカのために法を整備した。[しかし] 当地の先例よりも理論を用いたため、彼らがつくった事柄は、事実上まったく実行できないものであったようだ。国家の生死に関わる重要な諸事だけでなく、慣習法の事柄ですら、政治家は、歴史の手助けなしには何もなしえないのである。次のことは有名である——アッバース朝のカーイム・ビ・アムルッラー⁽²³⁾ の治世に、ハイバルのユダヤ教徒⁽²⁴⁾ が預言者による証文 *ahdname* だとして示した文書がある。[しかしその文書に記載されている] 証人のひとはハイバル征服以前に殉教しており、もうひとはかなり後にムスリムになったことが、歴史書 *tarih* から確認できた。そのため、証文は偽造だと判断されたのである。

国民にとっての歴史の有用さ

歴史は、ただ政治家のためではなく、国民 *efrad-i millet* にとっても不可欠で

ある。とくに、ムスリム世界 *saltanat-i Muhammediyye* に屹立する原則である四つの法源 *usul-i erbaa*⁽²⁵⁾ のうち、スンナとイジュマーへの典拠が、預言者伝や黎明期の出来事を語る諸著作であることに鑑みれば、こうした「預言者にかんする」偉大な章を含む歴史学はムスリム共同体 *millet-i İslamiyye* のあいだで学ばねばならない、と言っても誇張ではない。

誰にとっても歴史が重要であることは、いまの時代、自明の理と見なされた。各人に義務教育 *tahsil-i cebri* を課す卓越した諸民族 *akvam* において、歴史学は、正書法や算数のように、初等学校 *mekatib-i ibtidaiyye* の授業に含まれている。その児童のほとんどが、国家の仕事に就かないとわかっていても。

〈9〉真実！ 誰にとっても、いつも話している単語を書けないことや、日々購入する品物の代金を計算できないことは、人間性の程度を貶める欠点である。ならば、人々がおり、そのもつで人々が生きる社会あるいは人間世界の、偉人たちが重大事件についてまったく知らないことも、少なくない欠点と見なされる無知なのである。歴史の人々への奉仕は、たんにこの不完全さから救うことだけではなく、完全に理解するのに大きな助けとなるのである。

知性の方は輝く宝石であり、使われるほど、より輝く。こうして歴史は、時空を越えるかのごとく、偉大な人間世界の数千年分の大事件を、理解のまなざしの視界におさめる。それとともに、多数の作品集と注解それぞれの比較対照に、多くの秘伝かつ詳細な解説でもって携わることに奉仕するのだ。歴史のように、知的活動にふさわしい豊穡な学問はあろうか？

そもそも我々がいる進歩の時代、さまざまな諸学は、その初歩であろうと学ぶことがみなに必須の事柄だと見なされている。それらは、もし喩えても良いのなら、思考を過ちの攻撃から守るために造られた鉄の城塞になぞらえることができる。そしてその重要な塔こそ、歴史なのだ。これらのいずれかが不完全であれば、蒙昧はこの点から人間を征服しよう。

たとえば、天文学を知らぬ者は、彗星を見て、世界が災厄に遭うだろうと判断するのだ！ 歴史を知らぬ者は、『キョル・オール物語 *Köroğlu'nun Destanı*』⁽²⁶⁾ を聞き、聖性や奇跡を信じてしまう。

〈10〉歴史は、たんに啓蒙だけではなく、心を清めるのにも、もっとも役立つ学問的方法のひとつである。達見した者は、先人の道徳について、その短所と長所を精査する。世界は進歩するということを考慮するなら、先人の短所の多くは時代のせいだとみなすことができようが、その短所のすべてを、進んで避けねばならないと考えるのは自然である。そして先人の長所については、その時代の水準よりも偉大だと考え、せめて少しでも先人より先に進むことで、いまの時代の要請を実行するよう努めるのは当然である。

この偉大な学問が心に生み出す影響のゆえに、アリストテレスは、歴史を文学の序列において詩に次ぐものと見なした⁽²⁷⁾のである。

ローマのもっとも偉大な政治家のうちのひとりである高名なキケロ⁽²⁸⁾はといえば、より進んでいる。歴史は、人間世界のあらゆる状況についての論者であるから、その学習を教育の最重要事項のひとつと見なした。そのため、歴史に「人生の師」の称号を与えている。

愛国心と歴史

フランスの大臣にして文人のひとりギゾー⁽²⁹⁾は、人間について、その国民を適切に愛することすら、その歴史を知ることによって依拠していると説明した。

まことに、オスマン人たちは、この30年のあいだ間断なくさまざまな敵と相対してきた状況で、いかなる献身をも惜しまないことを示した。彼らは、愛国心 *millet muhabbeti* において、どれほど偉大であったかを実際に証明したのだ。ただ心のうちでのみこの友愛を推し進めた者たちにも、例えば、次のごとく言われるとしたら――

「ホジャ⁽³⁰⁾あるいはアーリー⁽³¹⁾による史書が語るには、5万戸いた我らの創始者たちは、タタールが現れるや否や、追われて引き下がりつつ〈11〉アフラトに至り、なおタタールを恐れてそこからまた散り散りになった不名誉な部族民からなっていたという。だが、そうではない。アラブ、イラン *acem* そしてヨーロッパの歴史書でもって証明され、とくに、もっとも誠実な真実の言語である

諸事件の動因 saike-i vekayi をもってして確証されたのは、次のようなことだ。ムスリムのもっとも祝福された勇者のひとりであり、人間性のもっとも輝ける装飾と見なされるジャラルッディーン・ホラズムシャー⁽³²⁾は、トゥランとイランを、インドとジョージアを動き回って、タタールの災厄に抵抗する目的で、いくつかの国を作った。そのころ、人知を超えたような多くの尽力によって実現した〔ジャラルッディーンの〕成功をくじくため、その有益な仲間であるはずのムスリム統治者たち、そのしもべたち、そしてその兄弟たちは、なしうる限りの悪行をしたのだった⁽³³⁾。しかしそのとき、ムスリムを存続させイスラムを隆盛させんとして、この神意にかなう聖戦に加わった献身的な一団〔つまり、オスマンの祖先たち〕が存在した。彼らは何年も、血の海で泳いだ。火の洪水を渡った。ついに祝福された模範たるジャラルッディーンが殉教したのち、タタールと立ち合うには力不足となった。敵への服従は、彼らの情熱が許さなかった。まだタタールに征服されていないシリアやコンヤ方面へ落ち延びた。しかして、ジャバルの浅瀬で逝去したスレイマン・シャー⁽³⁴⁾は、シリアへと赴いた集団の指導者のひとりであった。彼の死後、息子ガーズイー・エルトゥールル⁽³⁵⁾の尽力の旗のもとに集まって、コンヤ方面にやってきた数百の勇者は、この熱意ある殉教者の生き残りである」

—このような真実を知ることが、彼ら〔ただ心のうちのみこの友愛を押し進めた者たち〕が心にいただく愛国心を、より一層高めるであろう。それに疑いはあるだろうか？

以上の利点がまったく存在しないとしても、歴史の利点はなお〈12〉残るし、それは、我々の考えでは、すべての利点に勝りうる。この利点とは、人間が何かを知るのに寄与することである。

フランスの文学者で、非凡な風刺の才能をもつラブレール⁽³⁶⁾は、「食料を造り出すことは、星を見つけることよりも、人類にとってより有益である」と言ったそうだ！ 実際、利益がたんに物質的に求められるならば、この言葉は真実でありうる。しかし、それが人間の精神的な滋養であると考えれば、新しい星

を見つけることから思考が生み出す美味は、学を知る喜びという面において、種々の物質的喜びよりも好ましいと見なされよう。

そう、歴史が含む学知は、とても広大で熟慮にふさわしい。人間は、肉体的な力では巨石を地面から持ち上げられない。しかし精神的な力のおかげで、地球を、その潜在能力において変えうる遊具とした。望むならば海を地面に、地面を海に、平原を山に、山を平原に変える。地下に川を見つけ、空中に庭園を発見し、海で泳ぎ、空を飛び、自然のあらゆる力に打ち勝ち、恐ろしい稲光や偉大なる太陽に至るまで、利用するのだ。

歴史叙述の始まり

さて、我ら人類は、物質的な力について明らかに無力であるにもかかわらず、特別の知性のおかげでみずから進歩することにより、繁栄なき野蛮さから抜け出した。これほどの至高なる恩恵と高みを生み出すに至った行動や状況を、たとえその一部分であっても、教訓とするのが歴史である。世界にこれよりも滋味があり、より興味深い劇場があるだろうか？

アッシリアの歴史書を例外とすれば、最初に書かれた歴史書は、古代ギリシャ人の〈13〉こうした著作である。ただ、高名な歴史家チェーザレ・カントゥ⁽³⁷⁾は、綿密な精査を通じて、つぎのように論じている。ギリシャ人たち、そしてまた彼らを継いだローマ人たちの、歴史についての尊重される多数の著作がある。しかしそれらは、文章の雄弁の力でもって、集団や個人あるいは出来事を、持ち上げたり貶めたりして——みなに真実を教えるためではなく——ある考えに誘導するために書かれたものである、と。この種の著作は、真剣な歴史ではなく、それなりの知識を歴史から与える、お話と見なされるのが自然である。

アラブ史家の偉大さ

したがって、真の歴史学を創り出すという栄誉は、アラブの偉人たちに帰する。とくにイスラム学者は、預言者伝や教友の言行についての諸章に含まれる逸話伝承について、細心の歴史的調査を、ある程度まで示したのだった。であ

るから、[物質的] 方法がこれほど豊かで、文明がこれほど進歩しているにもかかわらず、ヨーロッパ人は、歴史について彼ら以上の、おそらくは彼らほどの完全な著作を生み出さなかった、と言っても過言ではない。

アラブの歴史家たちは、イスラム [登場] 以前に起きたさまざまな集団の出来事にかんして、多くの言葉で広まっていた伝説的な与太話を、判断に悩むことなく記録するという不注意を犯した。しかし、それがどれほど嘆くに値するとしても、イスラム [登場以降] の記録において、あらゆる偏見から離れて、彼らが実践した完璧な精査こそ、大きな賞賛にふさわしいのである。

ある地域もしくはある国について個別の歴史を書く者のほかに、ムスリムの普遍的な状況について語る歴史家たちのなかには、タバリー⁽³⁸⁾、イブン・アスィール⁽³⁹⁾、そしてアブルフィダー⁽⁴⁰⁾のような、才能豊かな者たちが数えられる。この素晴らしき類の人々のうち、もっとも卓越を示すすぐれた見識を持つ賢者は、イブン・ハルドゥーン⁽⁴¹⁾である。

〈14〉イブン・ハルドゥーンは、ムスリム各国を個別に検討し、重要な出来事を原因と結果とともに数頁にまとめた才能は、驚嘆に値する。実際のところ、イブン・ハルドゥーンが取り上げた、さまざまな時代の出来事には不完全なものもある。しかし、この欠点は、イブン・ハルドゥーンの研究における欠点ではなく、諸史料が完全ではなかったことに由来している。いくつかの些細な間違いもある。しかし、誰も、賢者であったとしても、人間性 [に由来する欠点] から完全には逃れられないことは、言を俟たない。

イブン・ハルドゥーンは、歴史学が完全たるものとなると同じく、この学にひとつの方法を据え、出来事の真正さを偽りから分かつための尺度を見つけようとした。そして彼は、含まれる知識の豊富さ多様さに鑑み、さらなるひとつの図書館と見なすべき『歴史序説 *Mukaddeme*』を書き上げたのだ。したがって、彼は歴史という学の創始者である。『歴史序説』においては、たとえば諸国には「寿命」があるがごとき、一連の誤った考えも見られる⁽⁴²⁾。しかし、この過ちは、書物の優秀さを損なわない。すべての自然を創造した手からですら、完璧に生まれるものはないのである。彼の著作にどれほど欠点があるとしても、イ

ブン・ハルドゥーンは、なおひとつの学問に基礎をすえたという栄誉に値する。全人類のうち、このような幸運が与えられたのは、数百人いたかどうか。

ヨーロッパでは、この数世紀、あらゆる学問と同じく歴史学も、海のように広がった。各言語において、ただ自国民だけではなく、全世界の出来事について、完全かつ詳細な歴史書がいくつもある。さらに、歴史学 hikmet-i tarih にかんして書かれた著作が一か所に集められるならば、小さな図書館となりうる。

世界史の重要性

我々の言語についていえば、歴史学などを軽視している。我々の国のすべての出来事を〈15〉集めた歴史書は存在しないのである。断片的に、いくつかの時代の事件を含んだ歴史書は、何ひとつ、読者を豊かにしない。なぜなら、いくつかの欠点はさておき、どこにも、我々と戦うかあるいは関係があった諸国にかんする必要な説明が無いのだ。例えば、我々の歴史書をひもとくと、ティムールとのアンカラの出来事⁽⁴³⁾のあと、オスマン朝の国土は、約11年のあいだ空位と分裂のなかにあった。にもかかわらず、その少し前にオスマン人たちをヨーロッパから追い出す目的で、スルタン・バヤズイト一世へ13万人の完全な軍団〔ニコポリス十字軍のこと〕を派遣したキリスト教諸国が、このような機会を利用しようとしなかったのは、驚きである。なぜ彼らはこのように怠慢だったのか、[オスマン史だけ読んでいても]まったく理解できない。しかし、歴史家がヨーロッパの出来事を調べたなら、いとも簡単に次のことがわかっただろう。バヤズイト一世の時代に、もともと我々にたいして行動を起こしたのは、ハンガリー政権と、この強力な支援者であるフランスの貴族たちであった。ハンガリーの力の源 medar-ı kuvvet は、統治者である大ジギスムント⁽⁴⁴⁾の個人的能力からなっていた。しかし、ジギスムントはニコポリスで敗北し、退路が追っ手によって断たれたため、ハンガリーにたどり着けなかった。そこで、ロドス島の騎士団長と一緒にドナウ川から黒海にくだり、イスタンブル経由でロドス島に来て、そこからハンガリーに帰還した。しかしそのとき、政権を篡奪していた彼の敵対者たちによって投獄されたのであった。

こうしてジギスメントは、我々が空位であった時代の多くを牢獄で過ごした。その後救出され、再び政権を獲得したけれども、このときには、全ての力をドイツ皇帝〔神聖ローマ皇帝のこと〕位の獲得と統治に費やした。〈16〉フランスは、王であるシャルル6世⁽⁴⁵⁾の罹っていた狂気が日に日に増していたと同時に、内憂外患が後を絶たなかった。このため、ハンガリー政権には我々とかかわりあう時間がなく、かかわるとしても、フランス貴族からの助力を期待できる可能性はなかったのだ。

序説の第一章 — ローマ史

さて私は、非才にして体調が思わしくなく、政務にも従事せねばならない。にもかかわらず、『オスマン史』という題名でこの書物を編纂することに駆り立てられた。それは、我らの言葉で書かれた歴史に存在する欠を補うことに、ささやかな寄与ができると望んだからである。

私は、歴史書本編 tarih を始める前に、序説を書かねばならなかった。その第一章はローマ史であり、イスラムが登場するまでの要約である。この要約は長いため、飽きてしまう読者もいるかもしれない。しかし、さらに短くすることはできなかった。ひとつには、ローマを知らずして、滅亡するまでムスリム諸国と関係し対立していた東〔ローマ〕帝国や、アンダルスで崩壊した政権や、西方でムスリムの征服の行く手に障壁となった勢力〔フランク王国〕の状況について、正しく考えられないからである。ふたつには、アラブ以前に登場した諸国のうち最大であるローマ国家を、アラブの王朝との釣り合いをとるために、読者へ比較〔するための材料〕を提示しようと思ったからである。我々の言語では、この目的に資するやり方で書かれた、参照するよう勧めるに値するようなローマ史は、ないのだ！⁽⁴⁶⁾

序説の第二章 — サーサーン朝

イスラムの黎明期、世界征服者の軍団が最初に撃破したのは、サーサーン朝である。サーサーン朝とムスリムのあいだには、同朝はムスリム国家に数年の

あいだ抵抗〈17〉しえた、という関係がある。この国家は、ムスリムの手で滅亡したときには、そもそも滅亡しかけの小さな共同体だった、と我らに敵対する者たちは説明している。しかし、そうではなかったことを示すために、第二章としてその歴史の概要を記した。

イランの向こう側で征服された場所は、トルコとチベットのハンたちによって獲得されたのだった。そもそも、この時代におけるハンたちの歴史は書かれていないと言えよう。事実、彼らは、名目的には中国の統治者に従属していたが、自立した行動をとっていた。ゆえに、中国とトルコ・チベットの関係はともかくとして、ムスリム政権とのかかわりはとても薄かったから、この時代にあった中国王朝の君主の歴史を語る益はなからう。

序説の第三章以降——ムスリム諸国

序説におけるムスリム諸国にかんする諸章は、序説に不適切なほど長い、必要だと思われる。なぜなら、我らの言語では『諸情報の諸頁 *Sahāifū'l-ahbar*』⁽⁴⁷⁾ という翻訳書以外、ムスリム諸国の出来事を詳述する歴史書はないからだ！『諸情報の諸頁』の内容はと言えば、不完全であるほか、説明の分量と事件の重要性のあいだに関係はない。例えば、アブー・アブドゥッラー・バリデー⁽⁴⁸⁾ が騒乱を扇動し、匪賊を指導したという活動について7ページ半が費やされているのに、偉大な信仰戦士であるシハーブッディーン・グーリー⁽⁴⁹⁾ については、ただ2行書いたのみで満足したようだ。このため『諸情報の諸頁』は、歴史を書く者にとって、いくつかの国の情報について素晴らしい典拠となる。その一方で、歴史の読者にとっては、簡便な歴史書を読むことで期待される思考の要点を、正しく〈18〉得るのにふさわしくない。とくに、ヨーロッパについての記述は、完全に誤りかつ欠けている。ムスリム諸国にかんするこの出典のみもとづく知識では、至高の国家〔オスマン帝国〕の事件についての疑問に、適切な考慮がなされえないのだ。したがって、この諸章に、余計と思われるほどに、説明を付け加えることが必要だと考えた。

ともあれ、簡便だがすべての重大事件を含んだイスラム史を著すことは、有

益である。そのために、序説がこれほど長くなってしまったのである。

オスマン史の執筆方針

本編であるオスマン史については、史料が許す限り、詳細に執筆した。ムスリムの出来事を補完し比較に資するために、各章では、他のムスリム諸国の事件それぞれについて、要約を記すこととした。非ムスリム諸国の事件については、我々に関係する者たちの順番が来たとき、挿入することによしとした。

私は、ムスリムの書物と、ヨーロッパの歴史書から、多くのことを調査した。わたくしめの調べでは、オスマン国家の出来事のうちもっとも重要なものいくつかは、有名な説と異なることがわかった。

このため、本編の歴史においては、出来事のすべてについて史料を示さねばならなかった。[一方]序説では、煩瑣なため、まったく新しいか通説に反する話題についてのみ、史料を提示するにとどめた。

歴史と法則

歴史の編纂に必要な仕事の件について言えば、現代のもっとも偉大な歴史家のひとは、「もし歴史が、似たような状況のために、いくつかの法則 *kaide* をとりだそうという〈19〉動機で集められた一連の出来事からなっているとすれば、ここから生まれる知識は、不足かつ無益なものだ。なぜなら、どんな出来事も、あらゆる事件と同じようには繰り返さないからだ。しかし、それぞれの出来事について、意志の力をもってして、多かれ少なかれ明快に説明する英知の言葉のまなざしで見ると、そのとき歴史がいかに大きな重要性をもつかわかる」と言ったそうだ！ この英知の教えにしたがい、拙著においては、批判的方法として思いつくいくつかの検討を、あえて述べた。しかし、出来事を私の検討に一致させるのではなく、反対に、検討を出来事から推論することに努めた。

私は、自分の判断を、十分に信頼しているわけではない。しかし、読者が著作を読んで、新しい一連の知識を得て満足してほしいと望む。

表記について

歴史家の責務として、書物を、可能な限り簡潔に記そうと努めた。そのなかに、簡潔な表現とはいえない文章や語句があるかもしれない。だが、信頼してほしい——それを私が選んだのは、私の意図する考えを、他のやり方で説明する方法を見つけられなかったからだ、と。

現在、外国語からオスマン語に入った単語は、フランス人の発音で表記されている。しかし、フランス人は外来語の大部分を、自身の言語にとりいれたさい、ゆがめている。ある外来語を、本来それが属している言語から受け入れることができるのに、あいだにフランス語を媒介してしまい、正しく書けるものを誤って記すことに、私は意味を見いだせない。たとえば、オスマン国家の歴史を記したローマのある著述家の名前は、「ハルココンディリ」⁽⁵⁰⁾である。フランス人は、この名前を「シャルコンディル」という形に変えたようだ。〈20〉言葉は彼ら自身のものであるから、彼らが望むように扱うことができる。しかし、我々がこのような転訛を認める必要も、関連性もない。この考えにしたがって、拙著で外国の名前が出てきたら、それらが属している言語での発音がどれほど多様であっても、そのように記すよう努めた。[しかし]例えば「カイセルとヘルキュル [カエサルとヘラクレス]」のように、ムスリムの諸言語に完全に受容されたものについては、その限りではない。

読者への願い

私は、拙著に誤りがないう、できる限り努めた。しかし、世界でも千にひとりの俊才すら持たないこうした僥倖は、私のごとき非才の身にはまったくありえないと確信している。そのため、おそらく全ての頁に見つかってしまうであろう欠点について、読者にはご寛恕いただきたい。

ロドス島、[H.] 1305年ムハッラム月15日 [1887年10月3日]、ナムク・ケマル

注

- (1) Fevziye A. Tansel, “N. Kemal’in Osmanlı Tarihi’ne Dair: Bilgimizi Tashih ve İkmal Eden Yeni Notlar,” *Bellekten*, 24/94 (1960): 271-72.
- (2) Ömer Faruk Akün, “Nâmîk Kemal,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, vol.32, İstanbul: İSAM, 2006, 370.
- (3) Tansel, “N. Kemal’in Osmanlı Tarihi’ne Dair,” 273.
- (4) Namık Kemal, *Osmanlı Tarihi, Medhal*, vol.1, İstanbul: Matbaa-i Ebüzziya, H.1305. この年は、西暦では1887年から88年にあたるが、刊行時、どちらの年であったのかを確定するのは難しい。というのも、『オスマン史』第一分冊は1887年の年末に印刷され、書店に並んだのは1888年の初頭だからである。出版時期について検討したアキュンは、市場に出回った時期を重視して1888年を刊行年としている。Ömer Faruk Akün, “Nâmîk Kemal’in Kitap Halindeki Eserlerinin İlk Neşirleri,” *Türkiyat Mecmuası*, 18 (1976): 73.
- (5) Namık Kemal, *Osmanlı Tarihi (Külliyat-ı Kemal)*, vol.1, part 1, İstanbul, Mahmud Bey Matbaası, H.1326.
- (6) ふたつの版のあいだには、細かな表記揺れ以外の差異はほとんどなかった。
- (7) Namık Kemal, *Osmanlı Tarihi*, vol.1, Ulviye Ilgar and İhsan Ilgar tr., İstanbul: Hürriyet Yayınları, 1971. Namık Kemal, *Osmanlı Tarihi*, vol.1, Mücahit Demirel tr., İstanbul: Bilge Kültür Sanat, 2005.
- (8) 設楽國廣「新オスマン人運動」と近代的歴史叙述の試み（一八八〇年代）——ナムク・ケマル『オスマン史』前書き（一八八八年）」歴史学研究会編『世界史史料』第8巻、岩波書店、2009年、140-43頁。
- (9) 第二版の冒頭には、『オスマン史』が発禁処分を受けたさいの公文書の写し（注46も参照）と、同時期に刊行されたケマルの著作（『ケマル全集』の別の巻）についての広告が掲載されている。本訳稿では、参考のため、これらも訳出した。
- (10) ここでは H.1306年となっているが、実際に刊行されたのは H.1305 (1887/8) 年である。Tansel, “N. Kemal’in Osmanlı Tarihi’ne Dair,” 283.
- (11) アブデュルハミト二世のこと。第二版は第二次立憲政期に刊行されたため、「陛下 *hazret*」などの尊称なしで呼び捨てにされている。
- (12) 宮廷において、ハレムとそれ以外のあいだにある区画（*mabeyn* もしくは *kurana-yı hazret-i Şehriyari*）にひかえる者を指す。マフムト二世（位1808-39年）時代以降は、君主への取り次ぎ役として重要な役割を担った。
- (13) ナームク・ケマルによる戯曲。インドの王の娘が主人公。内容は、ハレムの長に犯された主人公が最愛の人である王子と結婚した夜にハレムの長を殺し、王子とともに心中する、というもの。西洋の悲劇に影響を受けたといわれている。
- (14) ティマールとは一種の軍事封土を指す。オスマン軍団の中核をなすティマール騎兵は、軍役を果たす代わりにティマールを与えられた。しかし、銃砲の発展などの理由から、ティマール騎兵は徐々に衰退し、ティマール制は形骸化した。また、常備歩兵である

イエニチェリ軍団は、当初、キリスト教徒臣民の子弟を徴用するデヴシルメ制度によって人材が供給されてきた。しかし16世紀末より、デヴシルメによらずにイエニチェリ軍団に加わる例が増加した。

- (15) いわゆる「ジェラーリーの乱」。16世紀末から17世紀中葉にかけて、アナトリアで頻発した地方反乱。
- (16) オスマン二世（位1618-22年）やイブラヒム（位1640-48年）などの君主が、イエニチェリ軍団の反乱によって廃位させられたことを指す。
- (17) Nādir Shāh（位1736-47年）。イランのサファヴィー朝を滅ぼしたアフシャール朝の建国者。
- (18) Mehmed Ali（位1805-48年）。エジプトのメフメト・アリ政権（いわゆるムハンマド・アリー朝）の創始者。
- (19) メフメト・アリが新式軍団の兵員を徴兵したさい、徴兵免除を目的として、自分で指を切る、あるいは片目に打撲傷を与えた農民たちがいた。ユージン・ローガン、白須英子訳『アラブ500年史——オスマン帝国支配から「アラブ革命」まで』（上）、白水社、2013年、119頁。
- (20) John Locke（1632-1704年）。イギリスの哲学者、政治思想家で、イギリス経験論の基礎を築いた。政治思想では、社会契約論をとり王権神授説を批判している。後のアメリカ独立、フランス革命に影響を与えるなど、近代民主主義に多大な貢献を果たした。著書に『人間知性論 *An Essay Concerning Human Understanding*』、『統治二論 *Two Treatises of Government*』など。
- (21) Jean-Jacques Rousseau（1712-78年）。フランスの啓蒙思想家、作家、またロマン主義の先駆者とも。当時の社会を批判し、ラディカルな人民主権を訴えた。また、1765年には『コルシカ憲法草案 *Projet de constitution pour la Corse*』、72年には『ポーランド統治論 *Consideration sur le gouvernement de Pologne*』を著している。著書は『社会契約論 *Du contrat social*』など多数。
- (22) アメリカ合衆国憲法（独立時、カロライナ州を含む。ルソーが起草にかかわる）のこと。
- (23) al-Qā'im bi-Amr Allāh（位1031-75年）。アッバース朝第26代カリフ。父である前代のカリフ、カーディル（位991-1031年）と同様、スンナ派の立場を強く主張し、シーア派政権のブワイフ朝によって傀儡状態にあったカリフ権力の再興に努めた。
- (24) ハイバルはメディナ北方に位置するオアシスで、ムハンマドの時代にはユダヤ教徒のナディール族の亡命先となっていた。彼らは628年ムハンマドの遠征を受けて降伏したが、穀物類の収穫の半分と引き換えに引き続き居住を許されたといわれている。このさいの、ユダヤ教徒の降伏条件と土地分配の合法化にかんする問題は、後代に法理論上の議論の対象となり、様々な伝承も残っている（嶋田襄平『初期イスラーム国家の研究』中央大学出版部、1996年、288-97頁）。本文中の箇所は、カーイムの宰相であるアブルカースィムと歴史家のハティープ・バグダーディーが、ハイバルのユダヤ教徒の子孫が行った虚偽の申し立てを見破る逸話（Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa al-Nihāya*, vol.12, Bayrūt: Maktaba al-Ma'ārif, 1991, 101-02）に基づく。

- (25) edille-i erbaa, edille-i şeriyye とも。スンナ派四大法学派において法解釈のさいに典拠とすべき法源は、参照すべき順に以下の四つと定められている。①クルアーン、②預言者の言行であるスンナ、③共同体における法学者の学説の一致を意味するイジュマー、④類推を意味するキヤース。
- (26) アナトリアで活動した匪賊を主人公とする民間伝承。トルコ、イラン、アゼルバイジャン、中央アジア一帯に広く伝わる。実際のモデルには諸説あるが、17世紀オスマン帝国の旅行家エヴリヤ・チェレビの旅行記にもモデルとなった人物が記されている。
- (27) アリストテレスは『詩学 *Peri Poiētikēs*』のなかで、「歴史家は実際に起こったことを語るが、詩人は起こりうるようなことを語る」（アリストテレス、朴一功訳「詩学」内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集』第18巻、岩波書店、2017年、507頁）という有名な一節を残している。この後は「それゆえ、詩作（ポイエーシス）は歴史（ヒストリアー）よりもいっそう哲学的であり、いっそう重大な意義をもつのである」（アリストテレス「詩学」507-08頁）と続く。一般にはこの一節をもって、アリストテレスは歴史を詩に劣るものと考えていたとされる。
- (28) Marcus Tullius Cicero（紀元前106-43年）。古代ローマの優れた弁論家・政治家にして、多方面にわたる膨大な著作を残した高名な文人・哲学者。当該箇所の歴史にかんする発言は、『弁論家について』に見られる。キケロー（大西英文訳）『弁論家について *De Oratore*』第1巻、岩波書店、2005年、189頁。
- (29) François Pierre Guillaume Guizot（1787-1874年）。フランスの歴史家、政治家。1812年よりパリ大学の近代史講座を担当。後に政界へ入り、要職を歴任した。1847年には首相となるが、二月革命で失脚する。著書に『ヨーロッパ文明史 *Histoire de la civilisation en Europe*』など。
- (30) Hoca Sadeddin（1536-99年）。オスマン帝国のウラマーで、シェイヒュルイスラムも務めた。彼が著したオスマン帝国史である『諸史の王冠 *Tacü'l-tevarih*』は、その美文から名声を博した。
- (31) Mustafa Âli（1541-99年）。オスマン帝国の文人。書記職を歴任するあいだ、多数の著作をものした。歴史書としては、普遍史書である『諸情報の精髓 *Künhü'l-ahbar*』がある。
- (32) Jalāl al-Dīn Khwārazmshā（位1220-31年）。ホラズムシャー朝第8代目にして最後の君主。チンギス・ハン率いるモンゴル軍の西征に直面し強固な抵抗を試みるも、周辺ムスリム諸国との関係悪化もあり、最終的には敗北。逃亡先で殺害され、ホラズムシャー朝は滅亡した。
- (33) ジャラルルーディーンは、モンゴルに抵抗するかたわら、近隣のムスリム諸国で略奪行為を繰り返したため、ムスリム諸国は彼を排斥するようになった。ケマルは、これをジャラルルに対する裏切り行為と見なしている。
- (34) Süleyman Şah（生没年不詳）。オスマン一世の祖父で、ユーフラテス川のジャベルの地で溺死したと伝えられるが、実在の人物ではない可能性が高い。
- (35) Ertuğrul（生没年不詳）。オスマン一世の父。史実としてどのような事績を行ったのかは

明らかではないが、貨幣に名が記されていることから、実在の人物だと見なされている。

- (36) François Rabelais (1494?-1553?年)。フランスの医師、物語作家。修道院で生活するがたわらで古典を学び、エラスムスら人文主義者と交流した。風刺と笑いを込めた大著『ガルガンチュアとパンタグリュエル *Gargantua et Pantagruel*』を発表、社会や教会の時弊を痛烈に批判した。
- (37) Cesare Cantù (1804-95年)。リソルジメント期イタリアの文学者、歴史家。1833年にオーストリア官憲により思想犯として投獄される。出獄後、歴史小説『マルゲリータ・プステルラ *Margherita Pusterla*』を出版、幅広い名声を得た。また1838年からは『世界史 *Storia Universale*』の執筆を始め、生涯を通して全52巻を刊行した。同書により、カントゥは歴史家としても評価されている。
- (38) al-Ṭabarī (839-923年)。アッバース朝期に活躍した神学者・歴史家。主著にアラブ歴史書の祖といわれる、915年までの人類史『諸使徒と諸王の歴史 *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*』や、初期の伝承を網羅的に収集・検討した啓典解釈学書『クルアーン章句解釈にかんする全解明 *Jāmi' al-Bayān fī Tafsīr al-Qur'ān*』がある。ジャリール学派の祖としても知られる。
- (39) Ibn al-Athīr (1160-1233年)。ザンギー朝高官の父を持つ、主にモスルで活躍した歴史家。1231年までの事件を編年体で記した大著、『完史 *al-Kāmil fī al-Ta'riḫ*』の著者として有名。父と自身の経験に基づいて記したザンギー朝史も評価が高い。
- (40) Abū al-Fidā' (1273-1331年)。ハマールのアイユブ家出身。1299年以降マムルーク朝下ではシリア全域の支配を担った。みずからの経験とも併せて1329年までの出来事を扱う年代記、『人類史梗概 *al-Mukhtaṣar fī Akhbār al-Bashar*』を著した歴史家としても知られる。
- (41) Ibn Khaldūn (1332-1406年)。チュニス出身の歴史家。幼い頃から各地を遊学してイスラム諸学を修める。さまざまな王朝に仕えつつ、マドラサの教授や裁判官なども務めた。世界史書『イバルの書 *Kitāb al-'Ibar*』を執筆したことで有名。その序文にあたる『歴史序説 *al-Muqaddima*』では、優れた社会理論を展開し、後代にも強い影響を与えた。
- (42) イブン・ハルドゥーンは『歴史序説』において、王朝は三代で衰退すると論じた。しかし、19世紀にオスマン帝国の修史官をつとめ、『歴史序説』をトルコ語に訳したジェズデト・パシャは、適切な措置を施せば王朝はより長く延命できると考え、イブン・ハルドゥーンの見解を修正した。鈴木董「オスマン・トルコ社会思想の一側面——有機体的社会観の展開」『イスラム世界』14号、1978年、15-16頁。
- (43) ティムール朝の創始者ティムール（位1370-1405年）と、オスマン帝国第四代君主のバヤズィト一世（位1389-1402年）とによるアンカラの戦い（1402年）を指す。バヤズィトは大敗して捕らわれ、オスマン帝国は王子たちが争う空位時代（1402-13年）となった。
- (44) Sigismund (1368-1437年)。神聖ローマ皇帝（位1410-37年）。ハンガリー名はジグモン

ド。はじめはハンガリー王であり、1396年に十字軍を率いてオスマン帝国軍とニコポリスで戦うが大敗。1414年にはコンスタンツ公会議を招集し、教会大分裂に終止符を打った。

- (45) Charles VI (位1380-1422年)。百年戦争中のフランス王で、狂王とも呼ばれる。幼少で即位し、1392年にイングランドと戦争の終結について協議したが、同年夏には精神に異常をきたした。王国は分裂し、さらにイングランドによる内乱への政治的・軍事的介入が行われた。
- (46) 第二版ではここに、編者による以下のような注が付されている。
 「[H.] 1304 [1886/7] 年にナムク・ケマルがキオス島の知事として左遷されたさい、刊行された歴史書 *tarih* の最初の分冊には、この序文 *mukaddeme* [本訳稿である「執筆意図」のこと]にある「彗星」や「啓蒙」のようなくつかの語句が見られました。それについて、宮廷のスパイが何度も告発したため、『オスマン史』は発禁となりました。私たちは、そのアブデュルハミトの命令を、取り次ぎの間の暗号電報から引用し、この書物の冒頭に掲載しました。ケマルはこの事件の痛ましい影響で、まもなく死去しました。ナムク・ケマルは、アブデュルハミトのこの暴令のあと、歴史書に一語も付け加えられませんでした。著作の完成を望んだとしても、寿命が足りなかったのです。私たちが告知文で伝えたように、『オスマン史』は、征服の時代までのみを扱っています。『イスラム史』は、未完成でした。したがって私たちは、最初に『オスマン史』を出版することを選択したのです」
- (47) 17世紀後半、ミュネヅジムバシュ・アフメト・デデによって、アラビア語で著された普遍史書『諸国集成 *Camiu'd-düvel*』のトルコ語抄訳。翻訳は18世紀初頭のチューリップ時代に行われ、以降のオスマン文人たちによく読まれた。
- (48) Abū 'Abd Allāh Ahmad al-Barīdī (?-944年)。バリーディー家は10世紀のアッバース朝混乱期の中央政権獲得争いに加わった、バスラに祖を持つ一族。941年には当主アブー・アブドゥッラーを中心にバグダード入城を果たすが、占領時の非道さや住民への搾取からカリフと良好な関係性を築くことができず、短命な政権に終わる。
- (49) Shihāb al-Dīn Muḥammad al-Ghūrī (位1173-1206年)。ムイッズッディーンとも。ゴール朝第13代目の君主。数度のインド遠征を繰り返すなどして、最大版図を築いた。彼の死後ゴール朝は衰退の一途を辿るが、後にムスリム諸王朝が北インドを支配する土台となった。
- (50) Laonicus Chalcocondyles (1423?-90?年)。一般的には、ハルココンディリスと表記する。ビザンツ帝国の名家出身の歴史家で、ギリシャ・ローマ史を著した。とくに1298年から1463年にかけて詳しく、オスマン帝国勃興期についての貴重な史料となっている。